Annual Reports of Tohoku Philosophical Association

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000012

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

東北哲学会年報別刷

●第43回東北哲学会大会研究発表論文

ベルクソンの「過去自動保存説」

砂原　陽一

No. 10　1994　東北哲学会

●第43回東北哲学会大会研究発表論文

ベルクソンの「過去自動保存説」

砂原　陽一

古来、時間は様々な形で考えられてき、時には時間そのものの実在に関してさえも論議されるほど時間は哲学上の大きな問題である。ベルクソンもその問題に挑んだ一人であり、実際時間の探究はその哲学的生涯を一貫する主題であった。本稿ではベルクソンが考える時間の形がいわば集中的に表わされている「過去自動保存説」をそれとは真向から対立する大森荘蔵氏の過去観と対比させて検討することにする。いったいベルクソンはいかなる意味で過去は実在すると主張するのか。

「一杯の砂糖水をこしらえようとする場合、ともかくも砂糖が溶けるのを待たなければならない」[1]というベルクソンの言葉がよく知られているのは、そこに彼の独特の時間論が集約されているからである。われわれが期待や焦燥と共に砂糖が溶けるのを待つ間の意識の持続こそ、それが一切の空間的表象と無縁であるとき、真正の時間にふさわしいものであり、空間から純化されているという意味でその持続は純粋の名が冠される。ベルクソンが、われわれが通常「時間」と呼んでいる時計による時間および物理学がtとして扱う時間は、実は「空間化」された時間であって真正の時間でないと批判したことはよく知られており、本稿ではそうした科学批判を改めて扱うつもりはない。問題なのは、この意識の連続的質的変

化としての持続が時間としてのいかなる内実をもつものなのか、ということである。それは先ず過去から未来への方向をもつ。その方向を決定するものは生きることに必然的に伴う記憶の刻々の増大である。「人間の心の中にはほとんど進行しかない[2]」にせよ、ベルクソンのこの進行についての考え方は独特である。とにかく自我の内奥の心的持続は、空間と無縁であるがゆえに、順序系列を許す相互の明確な区別化や孤立化は不可能であり、したがってそこに認められるものは「意識事象相互の入り組み合や、自我の漸次的豊饒化[3]」のみである。ベルクソン自身、こうした持続の進行の仕方を「雪だるま式進行[4]」と呼んでいる。この持続の進行は隙間のない相互浸透の質的変化である以上、区分された部分がなく、したがって通常の時間関係が前提とする前後関係はおろか過去と現在の区分も存在しえないと考えられる。ただ存在するのは未来をはみながら己を膨張させ続ける全過去の推進である。ベルクソンにあっては、みかけ上はともかく権利上なにものも失われるものはない。あるいは又、われわれの通常の時間感覚である経過、つまり未来がやがて現在となって過去へと消失していくという事態はない。あるのはそうした方向の経過ではなく、記憶の増大としての継起である。ともかく意識そのものとしては、過去と現在との区分は存在しない以上、全てが過去といってもあるいは現在といっても同じことになる。キュンメルがそうした点を指摘し、「継起は、同時に、同時性へと止揚されている。かくて「持続」は本質的には現在的持続である[5]」と述べるも正当である。こうしたベルクソンの独特の時間論を支えている強力な前提は過去の実在性の主張である。この主張は処女作『試論』以来の一貫したもので、そこですでに「過去は生物体にとってはおそらく、また意識存在にとっては確実に一つの実在なのだ。流れた時間は、恒存すると考えられている体系にとっては利得とも損失ともならぬが、意識存在にとっては異論の余地なく利得なのだ[6]」と述べられている。

ところでいったいどのような形で過去が実在するといいうるのか。普通の常識ではむしろ、現在が消失して取り戻すすべもなく非存在になったものが過去であり、それだからこそわれわれはしばしば悔恨の情に襲われるのではなかろうか。べ

ルクソンの雪だるまの比喩を受け入れて、雪をかき集めて絶えず膨れていくのが雪だるまだとすると、確かに現在以前の過去の全ては雪だるまの現在の大きさとして結果している。だがそれでもなおわれわれの常識はベルクソンに対して、現在の大きさよりも小さかったかつての大きさはもはやないのではないかと言い立てうるのではあるまいか。もっとも雪だるまの大小を比較しうるのは小さかった時の過去の雪だるまを記憶している観察者にとってのことであって、雪だるまそのものとしては不断の連続的増大があるだけである。実際ベルクソンが時間を雪だるま式進行になぞらえたのもそうした内側からのみ感得される記憶の連続的増大とのアナロジーである以上、かつての大きさとことさらの比較を許さないその連続性にこそ力点がある。それはベルクソンの次の言葉から明らかである。「〔視覚よりももっと深い内的状態については〕不断の変化は気にかけないでおき、変化が増していって身体に新しい態度をきざみつけ注意に新しい方向を与えるほどの大きさになるまでは、それを意に介しない方が都合がよい。変化がまさにその大きさになった瞬間に、ひとは自分の状態が変ったことをさとる。真相は、ひとびとは休みなく変っており、状態そのものがもともと変化なのである」[7]。ベルクソンからすると、現在の大きさと対比させられる雪だるまのかつての小ささは、われわれの注意が不連続なその働きでもって連続的な一連の帯の上に人工的に区切ったいわば見かけ上の不連続の結果にすぎない。それは丁度「なだらかな斜面しかないところに、われわれは注意の働きの折線をたどって梯子段が見えるように思いこむ」[8]のと同様なのである。要するに現在から過去をふりかえってかつての思い出が一つの像として思い浮べられるのは、背景の連続の上に浮き出た不連続な形だというわけである。ベルクソンにとって背景の連続は、想起されるに至らない記憶の連続に他ならない。ベルクソンにおいて時間を語ることは記憶を語ることである。だが過去の実在性の論拠を記憶の連続性に求めるにせよ、「もはやない」ことが過去の意味であり、実際そうであるがゆえに想起という意識の態度が要求されるのではないのか。問題は通常の過去の意味である「もはやない」をどう考えるかにかかっている。

「もはやない」が有意味であるのは当然現在の「ある」が自明の前提であるからである。だがよく考えてみると現在の「ある」はさほど自明ではない。物理学は線上の一点でもって現在とするいわゆる点時刻をとる。時間の進行も点から点への時間軸上の不連続な移行とみなす。ベルクソンはすでに科学の扱う線形リニア時間が意識が体験する持続からの抽象であり、いってみれば知性の虚構物であることを看破した以上、ベルクソンにとって現在が点でありえないことは当然である。われわれが日常的に了解している「現在」は、決して瞬間的なものではなく、なんらかの幅をもつ。実際、日常会話等で「今」という言葉の使い方を一般的に考えてみると、「今」はその都度の発話の瞬間の「今」を表わす以上にむしろ「今……の最中」という使われ方が専らである。つまり食事中とか執筆中といった一つの幅をもつ行為、いわば行為のゲシュタルトについてまさに「今」が係結び的に使われるのである。中島義道氏が指摘するように[9]、それはあくまで一つのゲシュタルなのであって、例えば食事の始まりである箸を手に取ることからご飯を口に運んで咀嚼し、最後に喉に嚥下するに至る一連の行為過程は、確かに分節された行為であるけれども、しかしそこにいわば大きな「今」である「食事中」を構成する分節された単位としての少さな「今」の継起、すなわち箸を手に取る「今」が消えて過去となり、それと交代にご飯を口に運ぶ新たな「今」が出現すると考えることは困難である。もちろん食物を口に取ることを突然中断し、つい今しがたの箸を手に取った行為を想起することは可能である。だがその場合、例えばマナーが正しかったかどうかの反省という行為と化して「食事中」という一つのゲシュタルトとは別の行為のゲシュタルトに移行することであろう。してみれば時間経過とは分節的に区分された小さな「今」の継起やあるいは単なる記憶の増大ではなく、持続する大きな「今」から別の大きな「今」への移行と考えるべきである。ところでベルクソンは現在を定義して「われわれがわれわれの現在について語るとき、われわれが考えているのは持続のある間隔のことである[10]」と述べているが、この間隔の幅を決定するのが、ベルクソンの場合、生の関心であることを考えると、この持続の幅を一つの行為のゲシュタルトとみなすことができる。現

在の「ある」は身体の行為によって根拠づけられるのである。さらにそのことと関連することだが、現在の「ある」は風景前面の知覚表象の成立としても根拠づけられる。そしてベルクソンはそうした知覚表象の成立の根拠づけを『物質と記憶』第一章での行動主義的知覚論という形で試みており、その試みは十分成功していると思われる。

さて、ベルクソンにおいて二重に根拠づけられている現在の「ある」に対して、ベルクソンのいう過去の実在をわれわれはいかに考えるべきであろうか。過去が「ある」といってもそれは、知覚表象のように身体の可能的行動による風景前面の現前やましてや行為のゲシュタルトではありえない。だとすれば過去の実在の仕方が問題とならざるをえない。

ところで中村秀吉氏は「実在」の二つの意味を区別すべきだと主張している。[11] 実在^{1}は個々の事物、特定の色、数等について存在するという場合である。例えば地球がその一つである「惑星が九つ存在する」という場合、「ソクラテスは実在する」という場合がそうである。つまりその非存在についての言明が公共の了解に反する場合である。したがって実在^{1}は必ずしも知覚的に私に現前しなくても有意味にそれを語ることができる。今一つの実在^{2}は「もはや昭和天皇は実在しない」といった場合の知覚的現前あるいは現前可能性の意味での実在である。この実在^{2}の意味において地球も貴の花も実在する。現在だけが実在し、過去と未来は実在しないと普通了解されているのは実在^{2}の意味である。中村秀吉氏は、実在^{1}と実在^{2}はしばしば混同されるが、時間に関する困難を処理するために両者の区別の必要性を主張する。確かに過去の実在を主張する論法がないではない。例えば「紀元前五世紀にアテナイにソクラテスが生きていた」ことが歴史的にあまねく知られていることから、とりもなおさず「ソクラテスが生きていた時期が存在する」がいえる。その時期が過去であるから、過去の実在が論理的に帰結する。だがこの意味での実在は実在^{1}であって、実在^{2}ではない。

そうするとベルクソンはいずれの意味での過去の実在を言い立てているのかが改めて問題となる。実在^{2}は知覚的現前であり観察可能性であり、要する実際に「ある」ことの体験である。とすれば、ベルクソンの場合、過去の実在は実在^{1}では

ありえない。ベルクソンは他者相互との伝達的対話によって確立される公共的了解の次元を拓いたことはなく、飽くまで個人の内的体験を問題にする。ベルクソンは、「われわれの過去はその推す勢いによってそして傾向という形で残りなくわれわれに姿を現わすもので、表象になるのはそのかすかな部分にすぎない」[12]と、過去が現在の経験に統合されていること、過去の実在が経験の問題であることを明確にする。するとベルクソンの主張する過去の実在は実在[2]だということになるのか。しかしベルクソンのいう全過去が統合されているわれわれの「性格」はともかく、かつての出来事はとにかくもはや知覚的に現前しないのは事実である。そうするとそれを実在[2]だとするにはそう事は簡単ではない。われわれはこの問題を解くためにもベルクソンのいわゆる「過去自動保存説」を検討する必要がある。

既に述べたように、現在が「ある」ことの根拠の一つは、光景の身体への知覚的現前にある。しかるに過去は知覚の対象にならない。つまり過ぎ去ったものは見ることも触ることもできないのである。過去は知覚されるのではなく、想い出されるのである。言うまでもなく想起の働きは記憶に依る。したがって過去の実在に関する問題は、記憶と過去との関わり方の問題といえるが、実のところそこには重大な問題が伏在している。というのも、過去の出来事を想い出す想起作用には普通それを疑ってみることすらない抜き難い前提があるからである。それはキュンメルに代表される想起を「或る存在するものを顕わにするもの」[13]と捉える考え方である。想起をそうしたものとする考え方には知覚の直接性とは対照的に、記憶と過去との間接的な対面の仕方の構図が認められる。そのときの現在がいったん体験され、その体験があたかもアルバムに保存される写真のように記憶に保全され、あとになって記憶のアルバムを開くことが過去を想起することであると。いわば牢固とした常識にまでなっているこの考えによると、われわれは記憶に依って過去を再現する以上、そこにいわば二段構えの構造があることになり、そのために知覚が現在と直接対面するようには過去そのものに直接触れえないのである。過去の実在を言い立てるベルクソンは、はたして過去を記憶による再現と考えていたのか。

しかしベルクソンが打つのは先ず、過去の体験とその保存を役目とする記憶との二段構えの構造なのである。この二段構えの構造は、想起作用を非現実的なことを思い描く想像作用と同じく意識の一方向的な構成の働きと考えるところに現出する。つまり現在から記憶のヴェールの向う側に過去をみるところにこの構造が現われるのである。そうするとわれわれは想起内容である記憶心像と対面するだけで、いわばコピーに対するオリジナルであるところの過去そのものには手づかずのままになる。しかるにベルクソンからすると、過去は消失して非存在になってしまったのでも、あるいは現在の想起能力が構成的に再現するものでもなく、「過去はひとりでに、自動的に保存される」[14]のである。だが保存という言い方は誤解を招きかねない。というのも保存は冷蔵庫に代表される容器を連想させるが、そうした連想はベルクソンが精神に対してなによりも拒斥する空間的なものだからである。記憶はベルクソンにとって精神そのものを意味する以上、物質にのみ妥当する保存は適当ではないわけである。したがってまた「どこ」という問いもそれが空間的な場所を前提するがゆえに適当ではない。そのときの知覚体験と同時に形成され、したがってオリジナルに対するコピーなどではない記憶は、さながらレコード盤上の溝のように脳に刻印されるわけではなく、そこにそのまま残存するのである。この過去そのものとして残存する記憶は記憶力を要しない記憶であり、ベルクソンが「純粋記憶」と呼ぶものである。この「純粋記憶」についての通常の解釈は、想起作用以前に意識下に権利上覚えている筈だとみなされる個々のエピソードであるところの記憶内容だとされている。しかし想起作用以前という空間的な言い方にはいささか問題がある。それゆえ、それを記憶と呼ばず、いっそのこと過去そのものとみなしたらどうか。するとベルクソンの「過去自動保存説」は、想起に先行する過去の超越性を想起から独立する外在的実在性としてみなしているのだろうか。この問題を考える上で、過去の実在を否定する大森荘蔵氏（以下大森と略記）の考えとつきあわせてみることが、ベルクソン理解の上でも参考になる。

大森の過去実在の批判は、転倒したバークリ主義ともいうべき初期以来の「立ち現われ一元論」の延長線上にあるといっ

てよい。バークリにとって知覚表象内の観念が一切であるのと丁度逆に、大森にとってはなんらかの相貌をもって私に立ち現われる知覚されるものの光景が全てである。したがって現象のかなたに想定されるカント的物自体や表象の手前にある心といった実体は根拠のない形而学的想定として否定される。大森からすると、過去も知覚と同様の形で立ち現われるのであって、ただそれは想起的に立ち現われるというだけである。したがって過去は想起とは独立して自存する超越的存在ではなく、それはあくまで想起における言語制作物にすぎないとされる。大森はいう。「常識の誤りは、想起される経験に内在する過去性の性格を超越的に先行した知覚経験だと錯覚し、それが想起において再登場するまでの潜伏用トンネルとして記憶保持を捏造したことである」[15]。過去が言語制作物であるのは、知覚の経験が「……である」「……をする」という現在形の意味を与えるように、想起の体験こそが「……であった」「……した」という過去形の意味を与えるからだ、と大森はいう。こうした大森の或る意味で徹底した考えには、ベルクソンの考えと似たところと決定的に違う点がある。似た点は、両者とも想起の経験が知覚とは全く別種のものと捉えており、実際想い出された痛みは現に今痛いわけではないのは無論のことである。それにまた想起が決して知覚の再生ではないと考える点でも両者は同じである。両者いずれもかつての知覚とそれを保持する記憶という二段構えの構図を斥けるのである。しかし両者には決定的に相違する点がある。大森にあっては想起するという現在の行為体験が全てであって、それを離れて過去なるものは存在しない。もし想起することが、応々そう考えられがちなように、かつての経験の記憶心像を彷彿させるだけに尽きるのであるならば、大森の言い切り方は説得力をもつ。しかしそれだけにとどまらず、大森が「過去性の意味は想起体験で想起される過去形の中に全て埋め込まれている」[16]というときいささか問題がある。つまり問題はひとえに過去が想起体験に尽くされるかどうかにかかっている。

大森は、想起とは独立的に実在するような過去存在をきっぱりと認めない。それどころか記憶の存在すら否定し、「過去

の知覚経験が後刻再生するためにはそれがその時まで保存されていなければならないという記憶保存の捏造[17]」を言い立てるほどである。大森には想起の可能性の条件の問題はまるで存在しないといわねばならない。それというのも、大森は想起が基本的には夢見と類同的に考えているからに他ならない。つまり夢を見ることに根拠がないように「何かが想起されるには何の理由もなく何の根拠もない[18]」のだというのである。確かに夢の場合、寝床の中で昨晩みた夢を朝になって想い出すという常識に対する大森の批判は説得的である。想起に先立つ寝床の中での夢経験なるものは存在せず、したがって「夢は夜みるものではなく常に朝みたのである[19]」という大森の見解は、ウィトゲンシュタインの「夢は過去形でしか語れない[20]」という命題と共に首肯しうる。しかしそこから、想起が夢と同じものだといいうるであろうか。ここにはベルクソンが多大の関心を寄せた忘却の問題がある。われわれは、或る人物の名前を想い出そうとして想い出すに至らない落着きの悪さを多々経験する。忘れている名前をなんとか想い出そうとするその過程を反省してみると、われわれはそこにベルクソンのいう「手探り仕事であり、写真機の焦点合わせに似たもの[21]」を見出す。しかし、朝みた夢にはそうした努力感が伴わないのが常である。さらに写真機の焦点合わせが周縁のボケている大きな円をより小さな円へと収斂させて明瞭化することであるように、名前の想起の場合には現にしたこと以上の外延が広がっているのが実際であろう。夢と過去想起には決定的な相違があるといわねばならない。それに想起には外延という形で常に想起可能な地平が存在することは、必ずしも大森が批判する想起に先立つ外在的な過去の容認にはならない、と私は思う。大森は周知のバークリ命題をもじり、「過去とは想起されて在ることだ」という。現在は知覚的立ち現われ、過去は想起的立ち現われ、それが全てというわけであるが、立ち現われを構造的に考えてみると、いずれの立ち現われも必ず相貌を具有している。相貌とは図と地という構造をもつゲシュタルトであり、その際の地は主体の態度や関心のあり方に応じていつでも図に転化しうる地平である。つまり地は図化可能性なのである。そして地はフッセルのいう無限の観察を誘うという意味での超越である。超越は神的存在

のごとく外在する垂直的超越にのみ尽くされないのである。過去想起についても構造的には物の光景の相貌知覚と同じ事がいえる。大森のいわゆる「立ち現われ一元論」は、意識の中と外界との関係の仕方をめぐる伝統的主観客観問題に対する彼なりの解答であるわけだが、想起に先立ち想起から独立的に自存する超越的過去を否定するために想起可能性の地平として想起を可能にする水平的超越としての潜在的過去を見逃しているといわねばならない。だが可能性の現実化、つまり眠っていたものをたたき起こすことがベルクソンの考える想起の機制だとみなすならば、そこには誤解があるといわねばならない。というのもベルクソン自身、後から出てきたものがそれに時間的に先行したもののうちに萌芽として元々在ったとする考え方が、実は後なるものの時間を逆行しての先立つものへの入れ込みでしかない回顧的錯覚を犯すことだと批判しているからである。それゆえわれわれは潜在的過去の地平をアリストテレス的概念とは別の概念で捉える必要がある。その際、ドゥルーズが多くの示唆を与えてくれる[22]。ドゥルーズは、ベルクソンが「潜在性」と「可能性」のことさらな区別を設けていることを見逃すべきではないと強調する。ベルクソンが批判する「可能的なもの」は、アリストテレスがいう「本性上先なるもの」として隠れた形で元々在った筈のものである。元々在ったものがそのまま今眼にみえる形で実在化するわけなのだから、そこには真の運動にふさわしい転成や変化はあるべくもない。ドゥルーズは、「可能的なもの」の対概念が応々そう考えられている「現実化」ではなく、「実在化」なのだと主張する。「可能的なもの」は回顧的錯覚による偽概念であるがゆえに実在性をもちえない。それに対して「潜在的なもの」は、眼にみえる形での現実性を有していないけれども、確かな実在性をもつのである。事象の運動に他ならない「現実化」の真の対概念は「潜在的なもの」なのである。そしてその法則は分化と創造である、とドゥルーズはいう。ドゥルーズがこの法則で専ら言い立てているのは、ベルクソンが『創造的進化』で展開している根源の生のエランから発出して、或るものは植物として眠り込み、或るものは分化して遂には人類にまで至る生の躍動の仕方についてであるが、このことは過去想起のプロセスについてもいえる。潜

在性はそれ自身として自存するものではなく、創造過程の裏面として考えられるべきなのである。われわれは、ともすれば想起と想像についていずれも心像を思い描くことから、一様に自由な主体の一方向的な行為と考えがちである。なるほどベルクソンにおいても、潜在する純粋記憶の地平へと先ず赴く求心運動が想起には不可欠である。しかしより重要なのはその地平から現在へと現実化的に進む遠心運動の方なのである。われわれが過去を過去として知ることができるのは、ベルクソンが遠心運動と呼ぶ過去一般の潜在的地平が特定のエピソードへと収斂し、現在の記憶心像として現実化するその運動につき従う場合のみである。その逆、すなわち記憶心像のみによっては過去の形跡は捜すべくもなく、その場合にのみ記憶と過去の二段構えの問題が出てくるのである。したがってわれわれは、大森のように想起のうちに言語によって制作されたものが過去だと考えるべきではなく、想起を可能とし、想起の起動的推進力ともいうべき潜在的地平としての過去の実在をベルクソンと共に容認すべきなのである。

ところでベルクソンは、現在と過去いずれの実在を主張した上で、その区別をプラグマティクに捉えている。現在が私の関心を占めるもの、私を行動へと促すものであるのに対し、過去は本質的に無力なものなのである。したがって過去は潜在的な形で未来へと推しすすめる存在でありながら、直接的な形ではわれわれの行動に関わってこないものなのである。従来の哲学者達は意識のプラグティクな性格を捉えそこね、心理状態の本質を意識に尽きると考えてしまったために、心理状態が意識的でなくなると即心理は消滅すると事態を見誤った。しかし意識はあくまで行動の選択に照明を与える役のものであって、意識の本質とされている純粋認識の役は二次的なものにすぎない。したがって意識的なものはただ単に直接的有効性の同義語であって、存在の同義語ではない、とベルクソンはいう。要するにわれわれが行動のために意識をもつのは単に事実上のことで、決して権利上のことではないのだから、行動に与らない無力な意識も立派に実在するのである。それにしてもわれわれは、客体の側で眼前の知覚光景を越えて広がる今見えない地平の光景の実在を疑わないのに

対し、主体の側での意識されざる表象についてはその実在を疑い、それゆえに過去の非存在を自明のこととして言い立てる。だがベルクソンからすると、そうした過去の非存在の主張は分析的悟性の立場に立つからなのである。つまり空間の中に同時的に段階づけられる諸対象の系列と、時間の中で継起的に展開される心的諸状態の間に相違のみを見て、類似を見ないのはまさに分析的悟性のしからしめるものなのである。ベルクソンは、経験の事象が存在するといえるのは、（一）意識への現前、（二）規則的連関という両者切り離しえない二つの条件を充たすことによる、と考える。メルロ=ポンティが指摘するように、これら二つの条件がはたして経験の存在を構成しうるものかどうかについては問題があるが、ベルクソンのここでの力点は、分析的悟性の手前で自我との触れ合いに気づくことによって、意識されざる過去の重みを直観することにある。ともかくも客体の側と主体の側とではこれらの条件の充たされる度合が異なるだけで、両者いずれも同じ意味で存在するのである。確かに内的状態は、意識への現前が部分的な外界の対象と異なり、その現前は完全である。しかし連関はさほど緊密ではない。とはいえ内的状態には連関がまったく欠けているわけではなく、ただそれが外的対象に比べて優勢ではないというだけの程度上のことなのである。われわれの意識されざる潜在する過去の精神生活は、現在の状態を必然的に決定するわけではないけれども、紛れもなく条件づけているのである。とりわけわれわれの「性格」はあからさまではないけれども確かな形で実在する過去の条件づけを示すのである。このようにベルクソンの「過去自動保存説」を創造過程のうちの潜在性と解釈することによって、ベルクソン哲学における道徳的責任と倫理という新たな問題に拓ける道もみえてくるにちがいない。

註

(1) Henri Bergson, *L' Evolution créatrice,* (以下 EC と略記) Œuvres, Edition du centenaire, P.U.F. 1959, p. 502. なお、今後、ベルクソンからの引用は右記全集版による。
(2) Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience,* (以下 DI と略記) p. 87
(3) ibid. p. 72.
(4) Bergson, EC, p. 496.
(5) キュンメル『時間の人間学的構造』吉村文男訳、理想社、四一頁。
(6) Bergson, DI, p. 102.
(7) Bergson, EC, p. 496.
(8) ibid, p. 496.
(9) 中島義道「現在と過去とのあいだ」「現代思想」一九九三年、三月号。
(10) Bergson, *La Pensée et le mouvant,* (以下 PM と略記) p. 1386.
(11) 中村秀吉『時間のパラドックス』中公新書、六四-六六頁。
(12) Bergson, EC, p. 499.
(13) キュンメル、前掲書、一八四頁。
(14) Bergson, PM, p. 1387.
(15) 大森荘蔵『時間と自我』一〇八頁、青土社。
(16) 同著、四八頁。
(17) 同著、一二五頁。
(18) 同著、一一六頁。
(19) 同著、一二七頁。
(20) ウィトゲンシュタインは、『哲学探求』第三部 vii で次のように述べている。「目ざめたあとである出来事を物語る人々（自分たちはど

こどこにいた、などと)。そこで、われわれは物語に先行すべき「わたくしは夢を見た」という表現をその人たちに教える。わたくしはそれから何度か「あなたはゆうべ何か夢をみたか」とかれらにたずね、肯定あるいは否定の答えを受け、ときには夢物語を聞き、ときには聞けない。それは言語ゲームなのだ」。大修館版ウィトゲンシュタイン全集8、藤本隆志訳、三六五頁。

(21) Bergson, *Matière et mémoire*, p. 276-277.

(22) ジル・ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』(宇波彰訳) 法政大学出版局、一〇九頁。

(すなはら　よういち・金沢大学教養部教授)